高知県中村市　江ノ村遺跡

高知県中村市

江ノ村遺跡

一九九〇・三

1990

高知県中村市教育委員会

高知県中村市教育委員会

高知県中村市

江ノ村遺跡

1990

高知県中村市教育委員会

序

江ノ村遺跡の埋蔵文化財発掘調査は，農地改良に伴う調査として実施されました。

本遺跡は弥生時代と中世の複合遺跡と考えられていましたが，発掘調査により，その全貌が解明されており，郷土史研究の上からも意義深いものであります。

本書は，発掘調査の成果をまとめたものでありますが，調査にあたりましては，高知県教育委員会，市文化財保護審議会，関係機関，地権者及び地元関係者，また調査を担当された県文化振興課前田光雄主事，並びに作業に従事してくださいました皆様に厚くお礼申し上げ，本調査報告書が広く活用いただき，芸術文化の向上に資することを期待し刊行のごあいさつといたします。

平成２年３月20日

高知県中村市教育委員会

教育長　宮　崎　正　臣

例　言

1．本書は高知県中村市江ノ村字イゲの上に所在する「江ノ村遺跡」の発掘調査報告書である。

2．本発掘調査は農地改良工事に伴い文化財補助金事業の対象として発掘調査を行い，平成元年7月3日から同年8月15日まで調査を行った。調査面積は約400㎡である。

3．調査は中村市教育委員会が主体となって行い，発掘調査は前田光雄（高知県教育委員会）が担当した。

4．本書の編集・作成は中村市教育委員会が行い，報告書作成実務及び執筆は特に表記しない限り前田光雄が行った。報告書作成に際しては，遺物実測を北川　篤，写真図版を加藤好美・永井栄子，弥生・古墳時代遺物については出原恵三，中近世の遺物については松田直則の諸氏にご教示・協力を賜った。

5．本遺跡出土遺物の注記名は「ＮＥ89」とした。遺物・図面等の保管は中村市教育委員会が行っている。

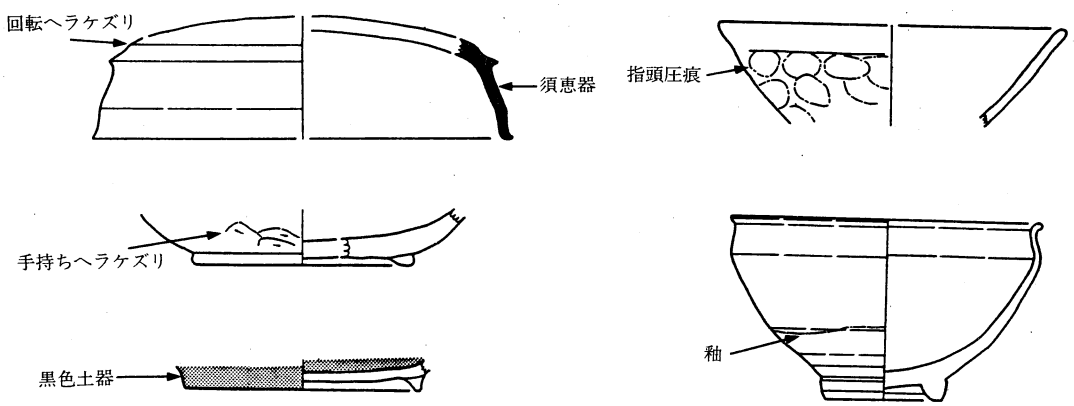
6．発掘調査参加者は次のとおりである。

大久保友春　大杉郁夫　大杉早美　岡本弘美　北川　篤　桑原照美　瀬尾　操　長尾　学
浜田稔喜　浜田有子

7．発掘調査及び報告書作成に際しては，地権者の方々及び下記の諸氏・諸機関から助言・協力を賜った。記して感謝したい。（敬称略）

森田尚宏　廣田佳久　前田秀則　高知県教育委員会　中村市環境センター

凡　例



目　次

序
例言／凡例
目次（本文・挿図・写真）
Ⅰ　調査経過……1
　調査に至る経緯／発掘経過
Ⅱ　遺跡の位置及び環境……2
Ⅲ　遺　　構……4
Ⅳ　遺　　物……10
Ⅴ　今までの調査成果……16
Ⅵ　ま と め……18
参考文献……19
写真
目録

挿図目次

第１図　遺跡分布図……3
第２図　江ノ村遺跡周辺図……4
第３図　遺構全体配置図……5
第４図　弥生，古墳時代土坑・ピット実測図……8
第５図　掘立柱建物跡ＳＢ１・実測図……9
第６図　弥生後期から古墳時代初頭土器分布図……11
第７図　遺構内出土遺物(１)……12
第８図　遺構内出土遺物(２)……15
第９図　遺構外出土遺物……15
第10図　昭和62年度調査区……17
第11図　昭和62年度調査出土遺物……17

写真目次

写真１　遺跡遠景
写真２　調査区全景
写真３　中央部土坑・ピット群，Ｄ４－ＳＫ２，Ｄ３－ＳＫ２
　Ｄ５－ＳＫ１，Ｄ２－ＳＫ１
写真４　ＳＢ１，ＳＢ１－Ｐ４・５・11・12，ＳＢ１－Ｐ10，
　ＳＢ１－Ｐ18，ＳＢ１－Ｐ７
写真５　ＳＤ１，Ｂ７－Ｐ１，Ｅ３－Ｐ４，Ｃ６－Ｐ３，Ｄ４
　－Ｐ11，Ｆ４グリッド出土土器，調査風景，発掘参加者
写真６　遺物(１)
写真７　遺物(２)
写真８　昭和62年度調査区全景，昭和62年度調査遺物

Ⅰ　調査経過

調査に至る経緯

江ノ村遺跡は，昭和48年に確認された標高約20ｍの台地に立地している弥生時代と中世の複合遺跡で，昭和62年に当該遺跡周辺に新設された中村環境センター（産業廃棄物処理場）の建設に伴う取り付道路が当該遺跡にかかるため，記録保存を目的とした事前の緊急発掘調査を行っているが，今回，この取付け道路の開通により，台地上の農地の利便性を欠き，農地改良(切下げ)工事に伴ない，63年に試掘調査に引続き，記録保存を目的とした発掘調査を実施したものである。

（中村市教育委員会）

発掘経過

平成元年７月３日より調査を開始し，表土掘削を重機により行う。表土の層厚は20～30㎝程で大部分が耕作により遺物包含層は既に削平を受けており，耕作土下は基盤層と考えられる黄褐色土となるところが多く，部分的に遺物包含層である褐色土が観られる程度であった。したがって，耕作土除去後はすぐに遺構確認面となり，弥生・古墳時代，奈良・平安時代，中近世の各時代の遺構・遺物が渾然と同一面で検出されており，300基余り検出したピット及び土坑群の時期的識別は容易ではなく，遺構覆土の類別化及び出土遺物によって極力，時期的識別に努めた。

調査方法は調査対象区全体に４×４ｍのグリッドを設定し，南北ラインはアルファベットＡ～Ｉ，東西ラインは数字１～９まで順次付し，Ａ１，Ａ２という具合にグリッドを呼称した（第３図参照）。なお，磁北は南北（Ａ～Ｉ）ラインに対してＮ－21°10′10″－Ｅである。遺構確認後，遺構毎に半截を行い覆土の観察及び図化，写真撮影を行う。また完掘後は個々の遺構の写真撮影を行う。遺構名は各グリッド単位で付名し，例えばＡ１グリッドで検出したピットについてはＡ１－Ｐ１，Ａ１－Ｐ２，土坑についてもＡ１－ＳＫ１，Ａ１－ＳＫ２とグリッド名を冠し遺構名を付した。ただし，溝については幾つかのグリッドに亙るためグリッド名を冠さず，ＳＤ１という具合にし，掘立柱建物跡については現場では上記のピットと同様に扱ったが，報告書においてはＳＢと略記号を冠し，新たにＳＢ単位でピット名を付してある。遺物の採り上げについては，遺構内出土遺物については細片を除き，図化及び写真撮影を行い，遺構外出土遺物についてはドット図は作成せず，１つのグリッドを２×２ｍに４分割し北西部を１，北東部を２，南西部を３，南東部を４とし，Ａ１－１，Ａ１－２という具合に小グリッド単位で一括採り上げを行った（第６図参照）。また遺物集中の観られる箇所については遺物出土状況撮影を行った。

全体図作成・全景写真等の一連の作業を完了し，現場でのすべての調査を８月15日に終える。

II　遺跡の位置及び環境

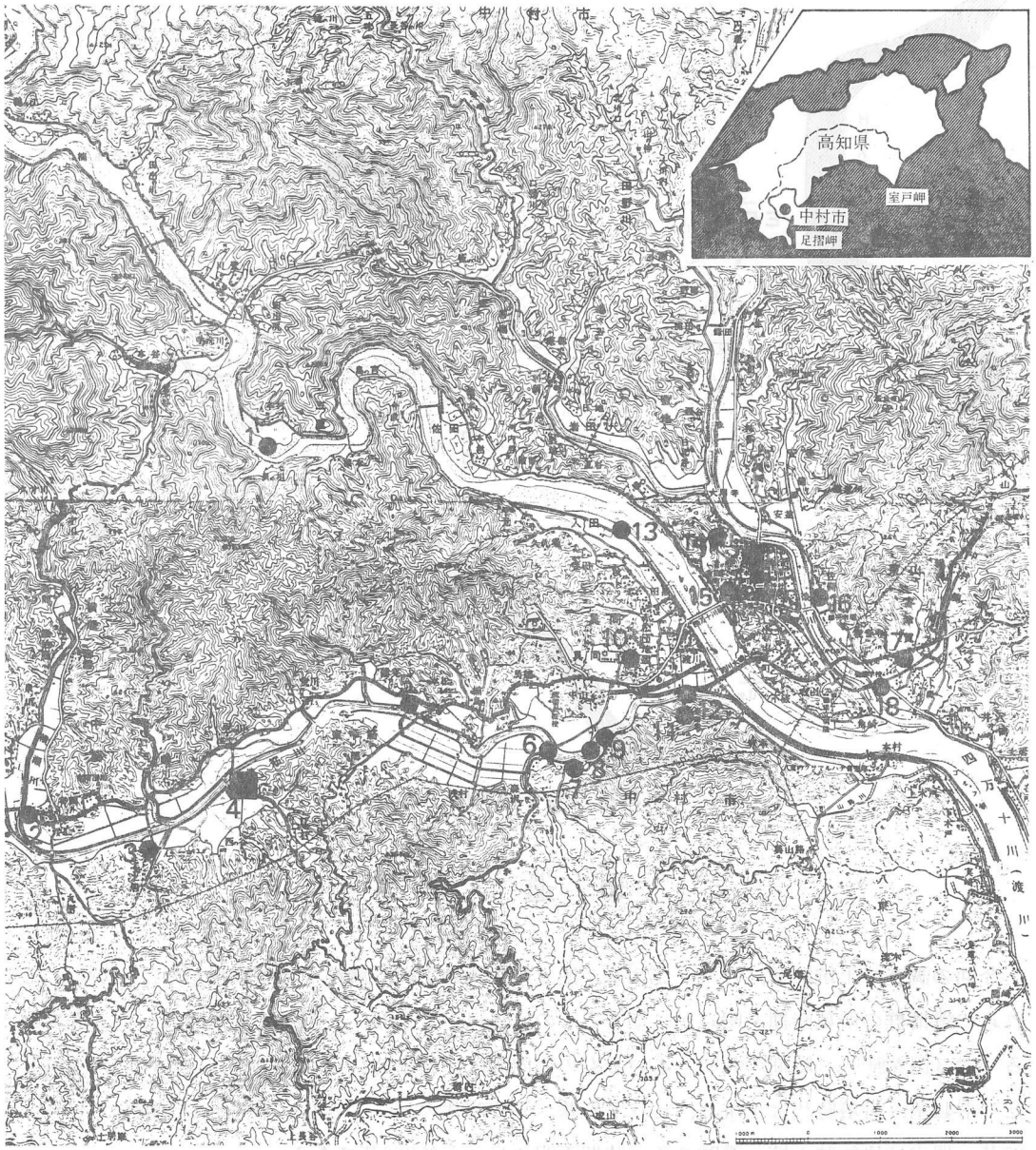
江ノ村遺跡の所在する中村市は，高知県西部の幡多と呼ばれる地域の中心的な市である。山間部から縦横に流れてきた四万十川は下流域で氾濫源を形成し，沖積平野部に市街地は展開している。中世には京都の一条家の治世によって，小京都と呼ばれるように高知とはまた違った独特の文化圏を形成している。

本遺跡は中村市街より西に5㎞程離れた水田地帯が広がる沖積平野に突き出した低位丘陵面の舌状部に位置する。沖積平野を四万十川の支流である中筋川が東流し，丘陵の舌状部は「ハナ」と呼ばれ，中筋川を臨むハナハナには中世の山城等が点在し，本遺跡の所在する標高20m程の字「イゲの上」のハナにも通例に違わず弥生・古墳時代，中世の遺跡の存在が認められている。

中村市内の主な遺跡（第1図参照）を上げると，縄文時代後期の三里，晩期の突帯文土器が出土した中村貝塚，有岡遺跡，晩期終末から弥生時代前期初頭にかけての入田遺跡，古墳時代後期の祭祀と平安時代～中世の集落跡の具同中山遺跡群，古津賀古墳，中世の中村城跡，栗本城跡等が知られ，高知県下でも比較的遺跡数，発掘件数も多く，1950・1960年代には早くも入田遺跡，中村貝塚に考古学的調査のメスが入っている。

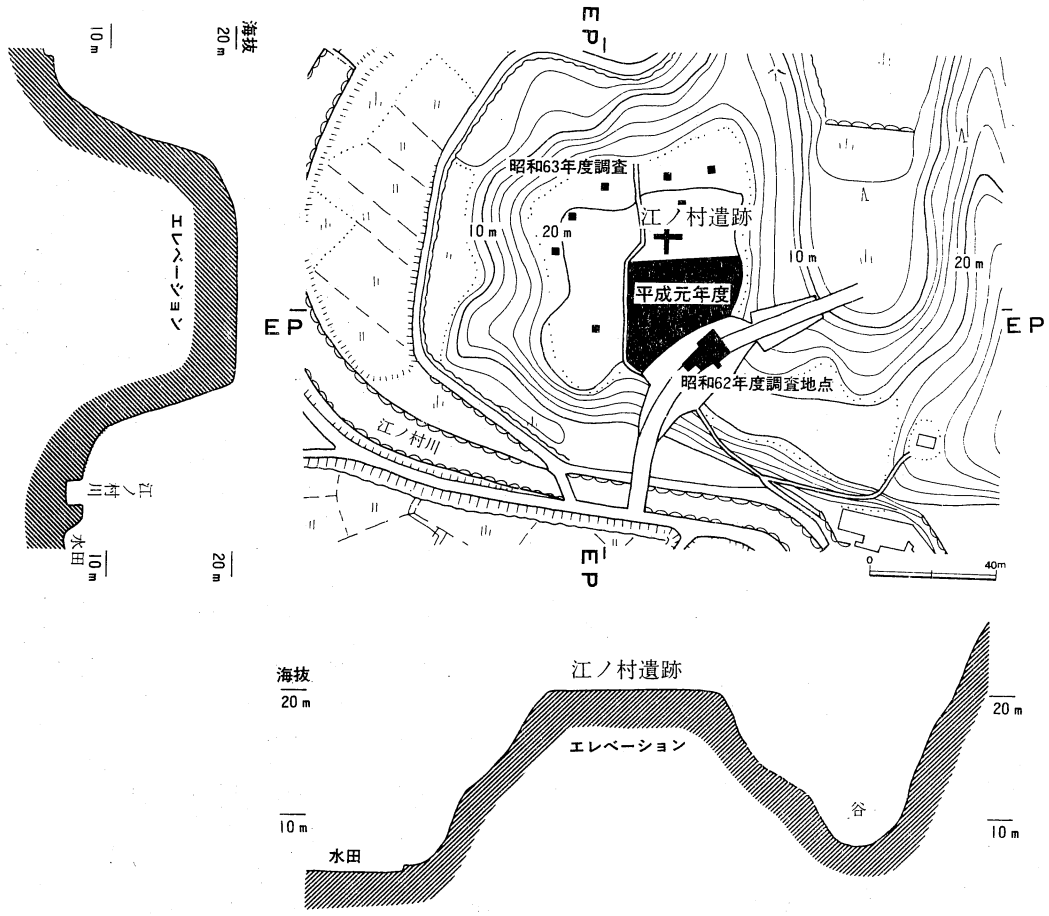
『先代旧事本紀』によると天韓襲命を波多国造としたとされており真偽の程はおくとしても，中筋川の宿毛市に高岡山古墳群と高知県下で唯一の前方後円墳である曽我山古墳，及び下流域には具同中山遺跡群の古墳時代後期の祭祀遺跡が存在することからして，古墳時代には中筋川流域を中心として早くから在地の豪族下に編成されていた可能性が強い。考古学的には，それ以降は本遺跡と具同中山遺跡群で平安時代末の土器群が出土する程度で未だ判然としていない。文献からしても『和名類聚抄』に大方・鯨野・山田・牧田・宇和の幡多五郷の郷名が観られる程度であり，律令制下の状況は不明な点が多い。中世になると『名月記』等に幡多荘園の記録が観られ，また九条家から一条家に幡多庄が譲られたことが記され，1468年には前関白一条教房が下向してきて，現在に連なる幡多の文化の礎を形成した。末裔兼定・内政が滅びるまでの期間の中村城跡，栗本城跡等が調査されて成果を上げており，一条時代には中国の明貿易の中継地に中村の下田港が利用されていたこともあり，輸入陶磁器も他の地域に比べて国内産の陶磁器と同等量以上の出土が観られている。

本遺跡の所在する江ノ村に限って観てみると，一条家の後に土佐国を統一した長宗我部氏の地検帳（天正17年－1589年）には「土佐国幡多郡江之村」として今の間村を含み，地高は140町7反となっており，全地高の半分を二人で領有していたことが分かっている。また江ノ古城，長法寺，五社大明神との古蹟・社寺名も観られる。近世になって寛保年間には地高1407石，戸数158，人口647人となっており，中村市内でも大村となっている。



1．三里(縄)　2．有岡(縄・弥)　3．上ノ土居(弥)　4．**江ノ村**(弥～近世)　5．国見(縄・古)
6．船戸(古)　7．風指(弥・平・中)　8．具同中山(弥～近世)　9．アゾノ(平・中)　10．栗本城跡(中)
11．香山寺(中近世)　12．石丸(弥)　13．入田(縄・弥)　14．中村城跡(中)　15．中村貝塚(縄)
16．佐岡(弥・古)　17．古津賀古墳(古)　18．古津賀(古)　注；カッコ内の「縄」は縄文，「弥」は弥生，「古」は古墳時代，「平」は平安時代，「中」は中世の略記である。

第Ⅰ図　遺跡分布図



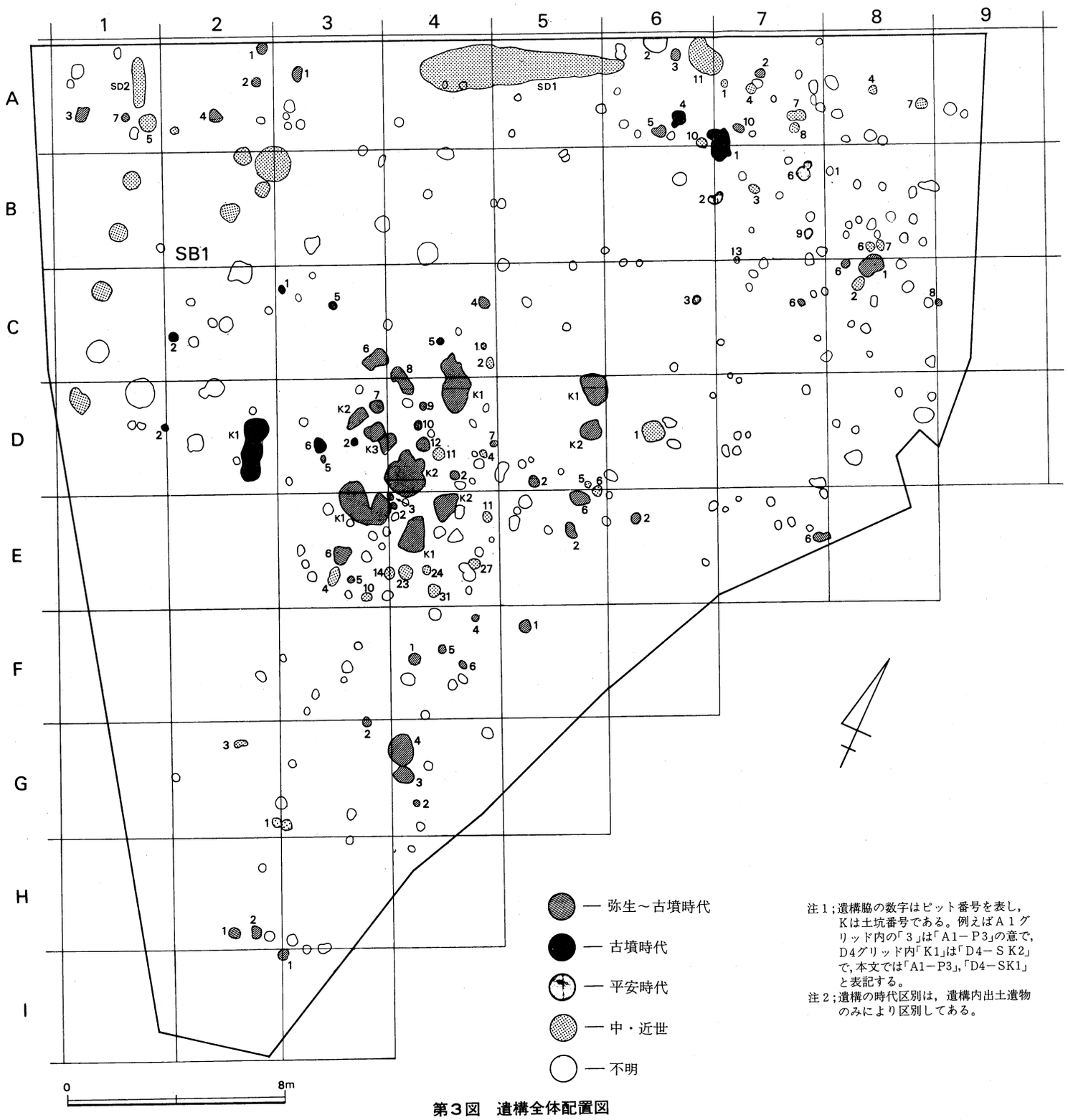
第2図　江ノ村遺跡周辺図

III　遺　　構

今回の調査で土坑22基，ピット 272 基，掘立柱建物跡 1 棟，溝跡 1 条を検出した。しかし，これらの遺構群の所属時期を明らかにできるものは⅓以下であり，大半が時期不明のピット群である（第 3 図参照）。時期の判明しているものの内訳は，弥生時代から古墳時代にかけての土坑 9，ピット42基，古墳時代は土坑 2，ピット 6 基，平安時代のピット 8 基，中近世の土坑 2，ピット27基，掘立柱建物跡 1 棟，溝跡 2 条，時期不明のピット約200基である。

弥生時代から古墳時代にかけての遺構は大半が不整形の土坑であり，それも調査区の中央部分に比較的集中が観られた。出土遺物は復元実測可能な半完形・完形の土器の出土はなく，多量の土器片で占められ，また土坑の形状・規模等に統一性が観られないことからもこれらの土坑群の性格等については不明のままである。

中近世については，調査区の北西部に掘立柱建物跡を 1 棟と中央部北端に浅い溝を 1 条を検出



注1；遺構脇の数字はピット番号を表し，Kは土坑番号である。例えばA1グリッド内の「3」は「A1－P3」の意で，D4グリッド内「K1」は「D4－SK2」で，本文では「A1－P3」，「D4－SK1」と表記する。

注2；遺構の時代区別は，遺構内出土遺物のみにより区別してある。

第3図　遺構全体配置図

した。その他には中央部の弥生・古墳時代の土坑群と重複するようにして，青磁・白磁・天目茶碗を出土したピットを10基余り検出している。中でもEグリッドラインのピットはある程度の配列を観せるもののそれ以上の展開がないために建物跡の一部分なのかどうかは不明である。

時期不明としたピットの幾つかには，土器粒に近いような１～２点の土器細片の出土が観られるものの，混入の恐れもあるために敢えて所属時期を明確化せず，時期不明とした。これらの時期不明のピットは調査区全体に点在するものの，その中でも比較的纏まりを観せるA～C－７・８グリッド，及び弥生から古墳時代にかけての土坑群が集中して観られる中央部のD・E－３・４グリッドであった。時期が判明しているものの弥生時代から古墳時代及び中近世以外のものについては，遺構も少なくまた遺物も稀薄であった。

ここでは主な遺構を図示し，概略を記す。

土坑・ピット（第４図）

D３－SK３

D３及びD４グリッドに位置し，土坑群のほぼ中央に存在し，瓢箪形を呈する。長径1.25m，最深部で0.34mを測る。土器片約50点余り出土しているものの，大部分が壺・甕の胴部破片で占められ，図示できるものはなかった。

D４－SK１

C・D－４グリッドに位置し，不整楕円形を呈する。長径約２m，最深部0.４mを測る。北側の壁近くで礫が１点出土している。土器片約140点が出土しているものの，図示できるものはなかった。

D４－SK２

D４グリッドに位置し，不整円形を呈する。長径約1.５mを測り，円形ピットより礫が２点出土している。土器片約180点出土しており，その中で№１の壺の口縁部破片のみ図示できた。

D５－SK１

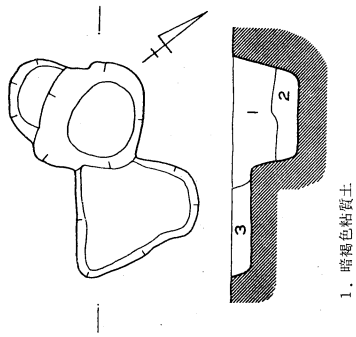
D５グリッドに位置し，不整円形を呈する。長径約1.２m，最深部0.25mの比較的浅い土坑だが，大形の礫が出土している。土器片は５点であった。

E３－SK１

D・E－３グリッドに位置する。元は２つの土坑だったと思われるが，調査ミスにより一つのものとなっている。図面上Aとしたものは，ほぼ方形を呈し，長径１m，深さ約0.４mを測るものと思われ，大形礫が出土し，また土器片もAの方から多量に出土しその数290点であった。

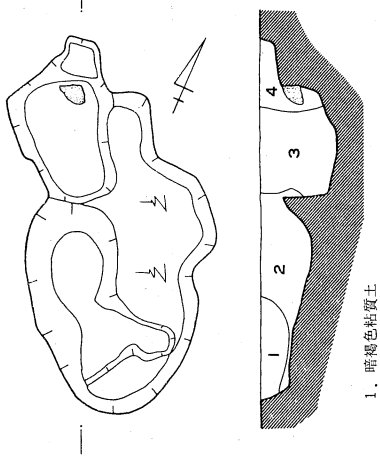
B７－P１

A・B－６・７の四つのグリッドにまたがる。楕円形を呈し，長径約1.１m，短径約0.７m，深さ0.５mを測る。遺物は土器片約220点，須恵器坏蓋１点が出土している。土器の小破片が土



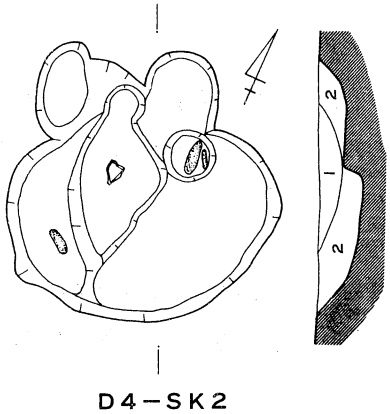
1．暗褐色粘質土
黄色ブロック多量，炭化物少量
2．暗褐色粘質土・炭化物少量
黄色ブロック・炭化物少量
3．明褐色粘質土
黄色ブロック主体
※土器片約50点出土

D3－SK3



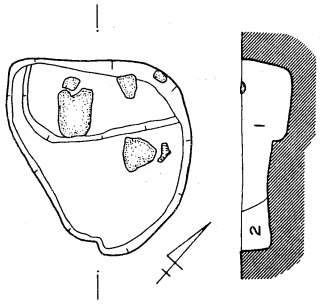
1．暗褐色粘質土
黄色ブロック少量
2．明褐色粘質土
黄色ブロック多量
3．暗褐色粘質土
黄色ブロック・炭化物少量
土器片多量
※土器片約140点出土

D4－SK1



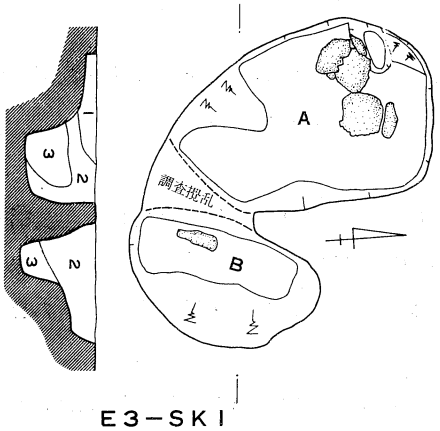
1．暗褐色粘質土
黄色ブロック多量，土器片少量
2．暗褐色粘質土
黄色ブロック少量，土器片多量
※土器片約180点出土

D4－SK2



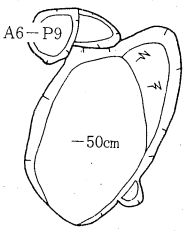
1．明褐色粘質土
黄色ブロック・小レキ多量
2．黄褐色粘質土
黄色ブロック少量

D5－SK1



1．暗褐色粘質土　黄色ブロック・土器片多量，少レキ少量
2．暗褐色粘質土　土器片多量，黄色ブロック・小レキ・炭化物少量
3．明褐色粘質土　黄色ブロック・小レキ多量・土器片少量
※土器片約230点出土

E3－SK1

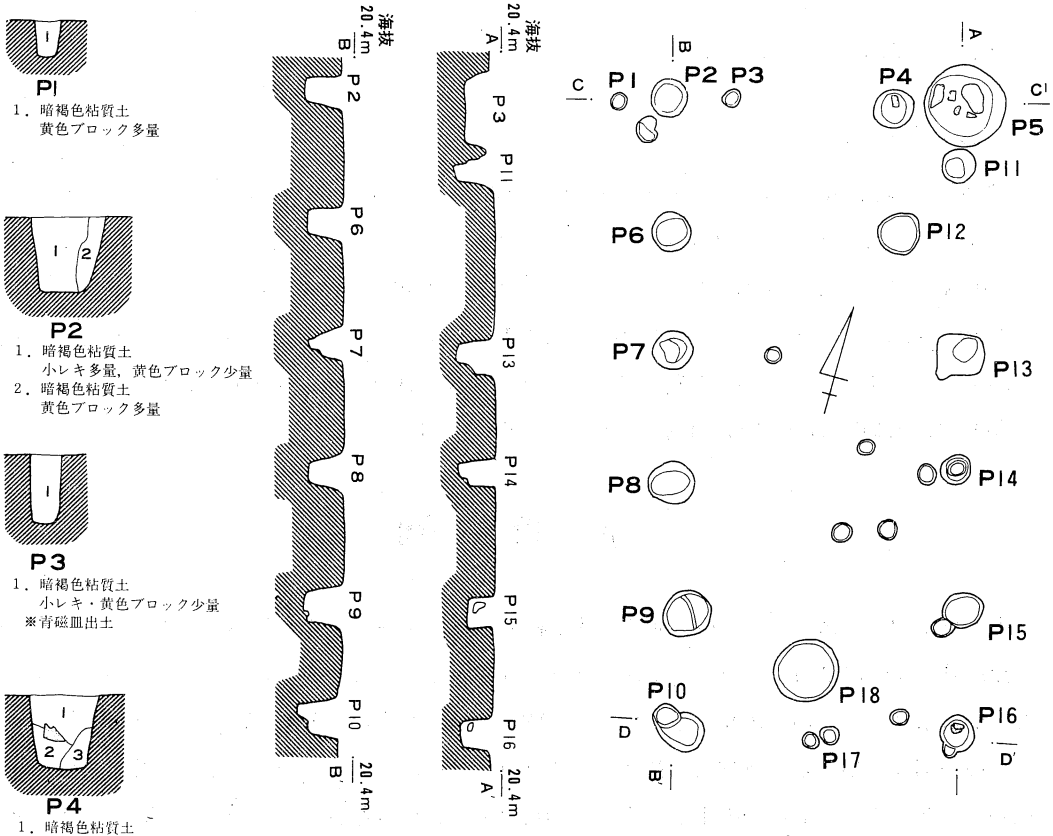


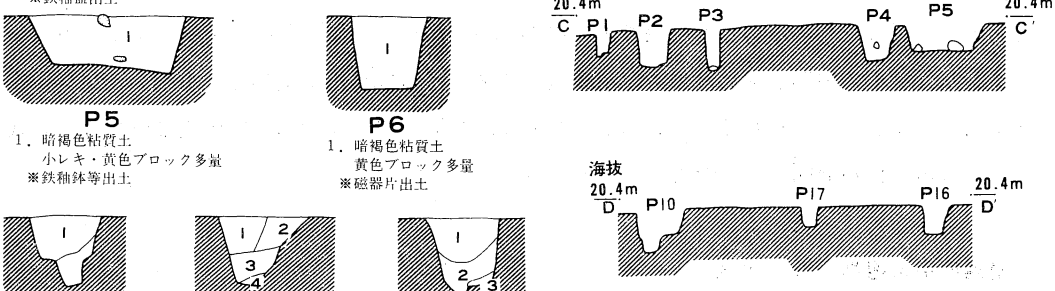
※土器片約220点，須恵器坏蓋1点出土

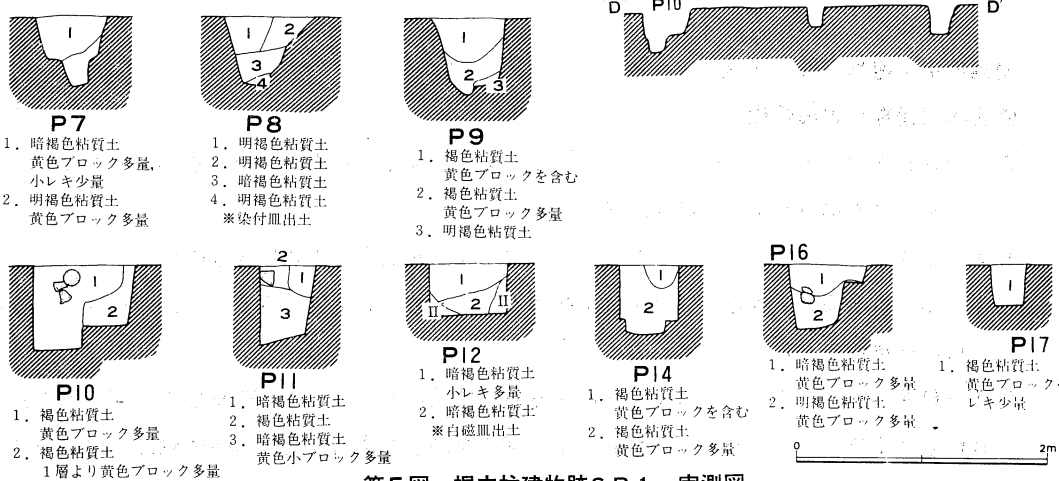
B7－P1

0　1m

第4図　弥生，古墳時代土坑・ピット実測図







第5図　掘立柱建物跡ＳＢ１・実測図

坑上面から底部まで万遍なく出土している。

ＳＢ１（第５図）

調査区の北西部に位置し17基程の柱穴で成り立つが，Ｐ５及びＰ18は径1.3m 及び１ｍ，深さ約0.4ｍの土坑であり，掘立柱建物跡とは別ものかもしれない。また西列は6本の柱穴がほぼ2ｍの等間隔で並び，また東列のＰ13からＰ16の４本は一直線に並びを観せるが，Ｐ４とＰ12は１ｍ程内側に配置している。しかし柱穴の規模はＰ17を除いて径50～70cm，深さ40～60cmとほぼ同一規模の柱穴であり，一つの建物跡と考えられる。規模は西列10ｍ，東列10ｍ，南列4.7ｍ，北列3.5ｍ，面積は約42㎡を測る。長軸方位はＮ－15°－Ｅを指す。

Ⅳ 遺　物

中近世に関しては青磁・白磁を始めとする陶磁器類の遺物が細片を含め80点程であった。陶磁器類以外には他に砥石，土錘，刀子が僅かばかり出土している。中近世の遺物については大半のものが遺構に伴うものであり，中近世の日常的な生活痕を窺わせるものばかりであった。

今回の調査で出土した遺物総点数は約3,400点と量的に多いものの，実際には弥生時代から古墳時代にかけての土器片が大半を占め，遺物総点数に占める割合は94%程であった。遺構内と遺構外出土の土器点数はほぼ半々で，夫々1,600点程であった。近現代の耕作により僅かに残った遺物包含層も攪拌を受けている可能性があるものの，遺構外出土土器の元位置からの遊離は僅かであったと思われる。そのことは調査区の中央部から中央部南側にかけて遺構外出土土器は集中しており（第６図参照），他の区域では遺物量が稀薄で，遺構外出土遺物と中央部の土坑群が密集度を同じくすることからしてもいえることであり，今回の調査範囲内では中央部分で弥生時代後期から古墳時代が展開していたものといえよう。

遺構内出土遺物（第７．８図No.１～46）

弥生時代後期～古墳時代

Ｄ４－ＳＫ２（No.１）　１は口縁がラッパ状に大きく開く広口壺で，口唇端部が上下に拡張している。胎土は赤褐色を呈し，砂粒を多く含む。

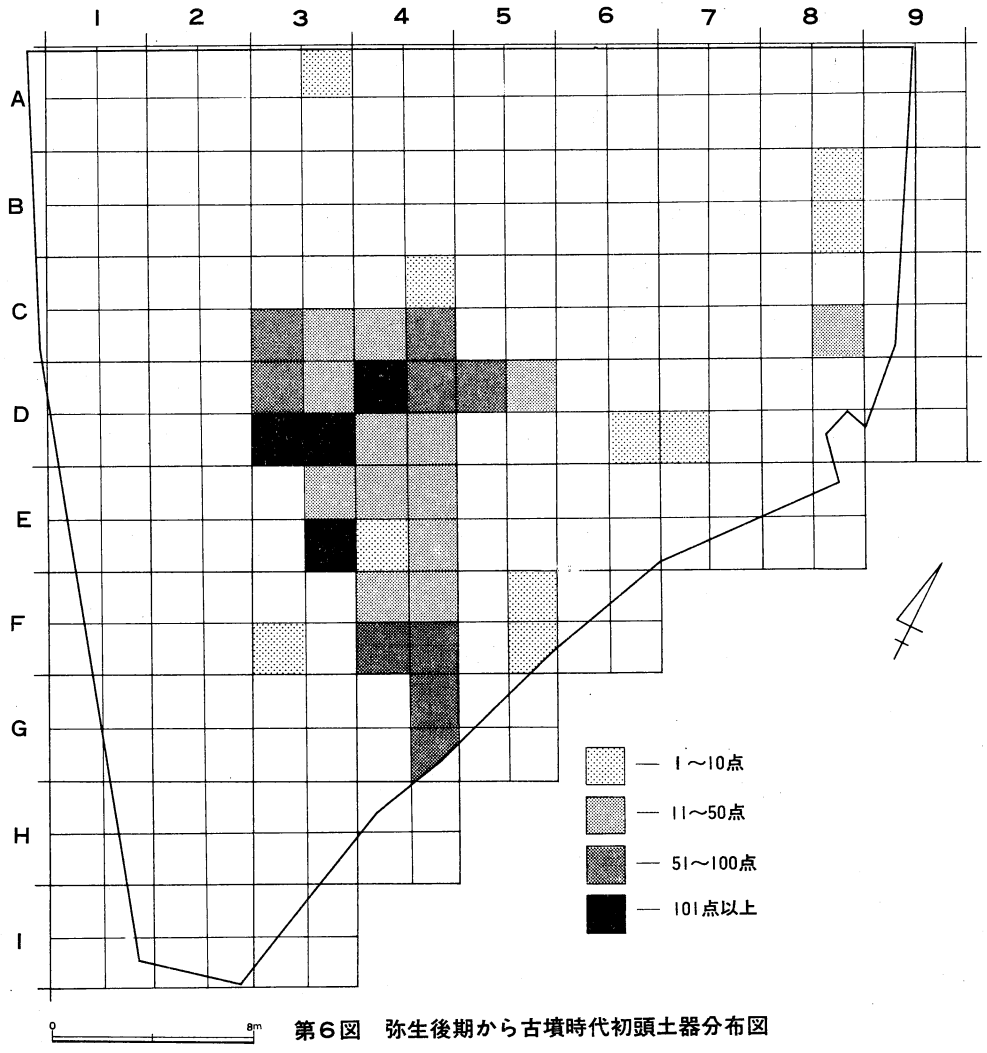
Ｅ３－ＳＫ１（No.２～４）　２・３は「く」の字状に屈曲する甕の口縁部破片である。３は内面に粗い叩き目が観察できる。４は尖底気味の丸底である。胎土は３点共に赤褐色を呈し，破砕された白色鉱物粒を多量に含んでいる。

Ｄ２－Ｐ６（No.５～７）　５はやや屈曲する口縁部破片で，胎土はやや桃色を帯びた赤褐色を呈し砂粒を多く含む。６は断面が台形状を呈し刻みを施した突帯を有する壺の胴部と頸部の境の

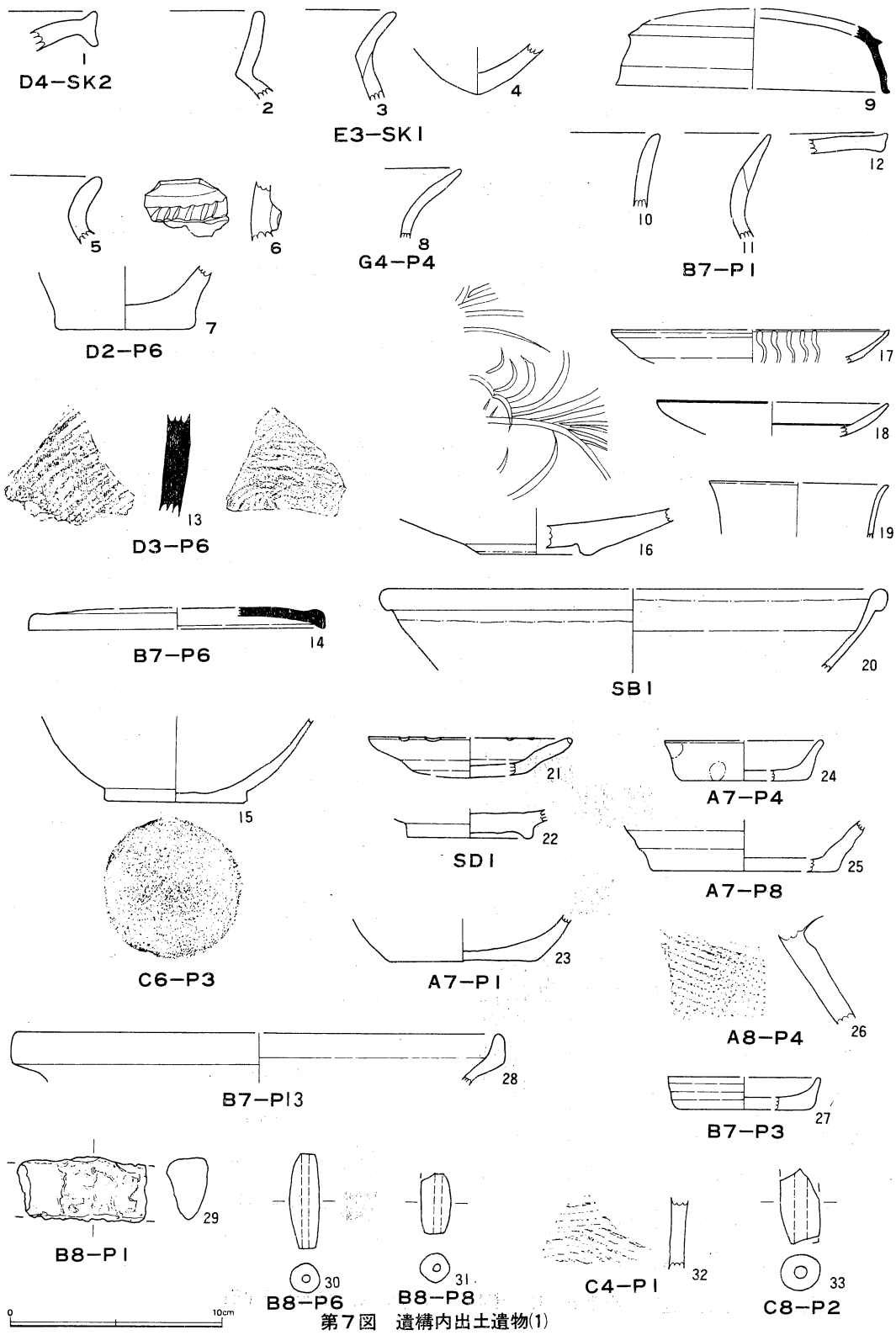
破片である。胎土は微砂粒を微量含むのみできめ細かく，色調は褐色を呈しやや堅緻である。7は平底の底部破片である。砂粒を多量に含み灰褐色を呈する。

G4－P4（No.8）　8は緩やかに外反する口縁部破片である。砂粒を多量に含むもののやや堅緻で色調は褐色を呈する。

B7－P1（No.9～12）　9は須恵器坏蓋である。天井部と口縁部の境が突帯状に突出し，天井部は回転ヘラケズリを行う。胎土は砂粒を微量含むのみで精選されており，色調は灰黒色を呈する。口径12.8cmを測る。10～12は弥生及び古墳時代の甕・壺の口縁部破片である。10・11は緩やかに外反し，10は砂粒を多く含み赤褐色を呈する。11は砂粒を多量に含むもののやや堅緻で色調は褐色を呈する。12は口唇端部を上方に僅かに折り返し，ラッパ状に大きく開く広口壺で外面



第6図　弥生後期から古墳時代初頭土器分布図



第7図　遺構内出土遺物(1)

に僅かに叩き目が残る。

D3－P6（No.13）　13は須恵器甕の胴部破片である。内外面共に叩き目が観られ，外面は格子目状，内面は渦巻き状の叩きである。胎土はきめ細かく白色を呈する。

平安時代

B7－P6（No.14）　14は坏蓋で天井部は回転ヘラケズリを行い，口唇部は緩やかに折り返す。鈕は破片のため付くかどうか不明である。胎土は精選されきめ細かく，色調は灰褐色を呈する。口径14.1cmを測る。

C6－P3（No.15）　15は円盤状の底部を有する土師質土器碗である。底部の切り離しは回転糸切りである。体部下半にやや丸味を持ち，体部上半から口縁にかけて外傾気味に立ち上がる。胎土はきめ細かく灰白色を呈しやや軟質である。底径6.8cmを測る。11世紀代の所産と考えられる。

中近世

SB1（No.16～20）　16は青磁皿で内面に陰刻が観られ，高台は内削ぎ状で底裏には重ね焼きの際の砂目跡が観られる。灰白色のきめの細かい素地で，淡緑色の厚い釉がかかる。17は鉄釉を全面に施釉し，内面に波状の陰刻を施した皿である。素地は灰白色のきめ細かく，堅緻である。18は染付皿である。内面に呉須による輪線一条を施している。口唇部には鉄釉による口錆を施している。素地は白色で精選され，黒色微粒子を少量含む。19は白磁筒碗で素地はきめ細かく，白色を呈している。20は鉢で玉縁状の口縁のみに鉄釉を施釉し，素地は灰黒色を呈し堅緻である。

SD1（No.21，22）　21，22は共に青磁皿である。21は口縁部に輪花を刻んだ稜花皿である。灰白色のきめの細かい素地で，淡緑色の厚い釉がかかり，貫入が認められる。22は見込み内は内ハゲとなり，底裏は露胎となっている。釉の発色は橙色を呈し僅かに貫入が入り，素地はきめ細かく橙色を呈する。

A7－P1（No.23）　23は土師質土器碗の底部破片である。平底の底部から直線的に外反する。胎土が軟質なため底部等の整形は判然としないが体部内外面はナデ整形と考えられる。

A7－P4（No.24）　24は土師質土器小皿でヘラ切りの平底からやや外反気味に立ち上がる。整形は内外面共にナデであり，僅かに指頭痕が観られる。胎土はきめ細かく，赤褐色の斑点粒を含み，軟質でやや赤味を帯びた明褐色を呈する。

A7－P8（No.25）　25は土師質土器碗の底部破片で平底の底部から直線的に外反する。胎土が軟質なため底部等の整形は判然としないが体部内外面はナデ整形と考えられ，体部にはロクロ成形の際のロクロ目を明瞭に残している。胎土はきめ細かく赤褐色の斑点粒を少量含み，色調は明褐色を呈する。

A8－P4（No.26）　26は甕片で外面に格子目状の叩き目が観られる。胎土はきめ細かいもの

の焼成が悪いのかやや軟質で明褐色を呈している。

B7－P3（No.27）　27は土師質土器小皿でヘラ切りの平底からやや外反気味に立ち上がる。整形も内外面共にナデであり，外面にロクロ目を残す。胎土はきめ細かく，赤褐色の斑点粒を含み，軟質で明褐色を呈する。

B7－P13（No.28）　28は受け口状の「東播鉢」で，胎土は砂粒を少量含み堅緻で灰色を呈する。

B8－P1（No.29）　29は小刀状の鉄製品で断面は三角形を呈する。

B8－P6（No.30）　30は筒状の土錘である。重さは5.6ｇを量る。

B8－P8（No.31）　31は筒状の土錘の破片で重さ4.5ｇを量る。

C4－P1（No.32）　32は甕片で外面に条線状の叩き目を横・斜位に施し，胎土はきめ細かく堅緻で，色調は黒褐色を呈する。

C8－P2（No.33）　33は筒状の土錘で孔径が１㎜程度のものである。重さは残存7.4ｇを量る。

D4－P11（No.34）　34は天目茶碗で削り出しの輪高台で腰部から体部にかけては余り丸味を持たず，口縁部が強くくびれる。外面腰部から高台は露胎となっており，その他に光沢のある黄褐色の灰釉を施釉する。口径11.0，底径4.1，器高6.5cmを測る。

D5－P5（No.35）　35は染付皿で，口縁部内面には呉須による瓔珞文状の絵付を施す。

D5－P6（No.36，37）　36は白磁皿で白濁色釉が厚くかかり，素地は灰黒色できめ細かい。37は土師質土器小皿で全体をナデ整形で仕上げる。胎土はきめ細かく赤色斑点粒を含み桃色を帯びた明褐色を呈する。

D6－P1（No.38）　38は染付皿である。呉須により絵付を施し，内面に輪線２条と芙蓉，外面には渦巻き状の絵付である。

E3－P10（No.39～43）　39は青磁碗で口縁が折縁状を呈し，胴部に鎬蓮弁文が観られる。40は白磁皿の底部破片である。素地は白色で精選され，黒色微粒子を少量含む。41，42は断面が円形を呈する刀子状の鉄製品である。同一製品であろう。43は筒状の土錘で重さ4.8ｇを量る。

E4－P11（No.44）　44は白磁皿の口縁部破片である。素地は白色で精選され，黒色微粒子を少量含む。

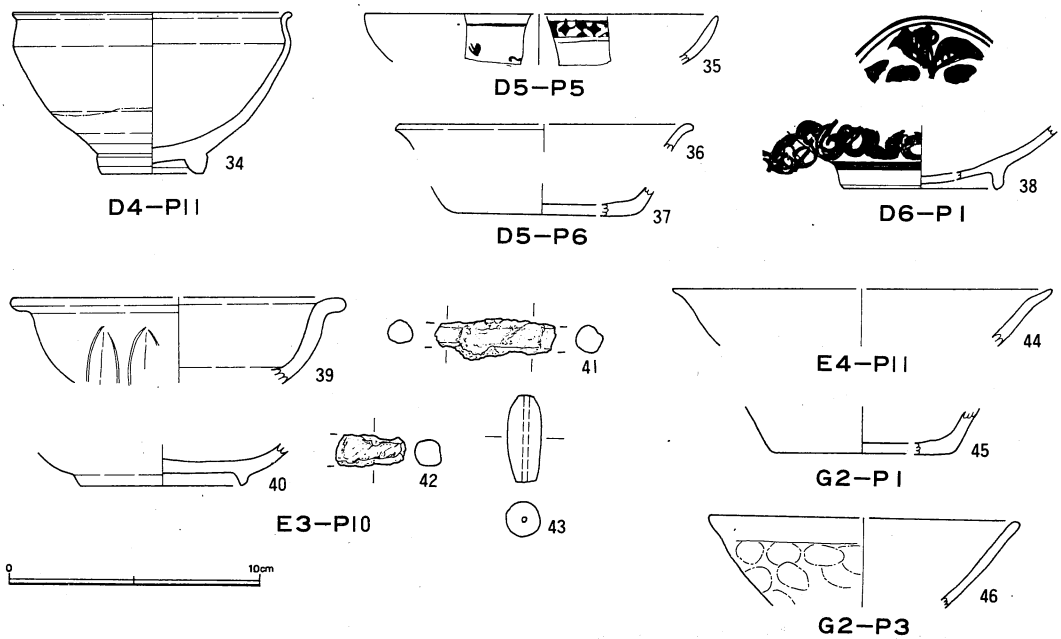
G2－P1（No.45）　45は土師質土器碗の底部破片である。平底の底部から直線的に外反する。胎土が軟質なため底部等の整形は判然としないが体部内外面はナデ整形と考えられる。

G2－P3（No.46）　46は瓦器碗で直線的に外傾し，口縁・内面はナデ，体部外面は指頭圧痕を施す。胎土はきめ細かく，堅緻で色調は灰色を呈する。

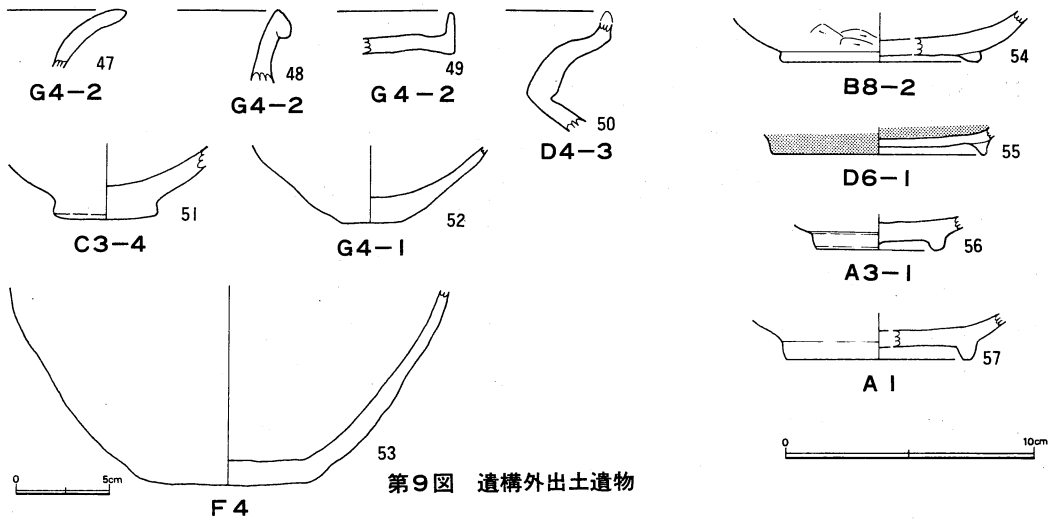
遺構外出土遺物（第９図No.47～57）

弥生時代後期～古墳時代

47～50は口縁部破片である。47は緩やかに外反し，胎土はやや桃色を帯びた赤褐色を呈し，砂



第８図　遺構内出土遺物(2)



第９図　遺構外出土遺物

粒を多く含む。48は口唇部を面取りし，胎土は赤褐色を呈し砂粒を多く含む。49は複合口縁で口唇部端を折り返し外面に粗い叩き目が観られる。胎土は赤褐色を呈し，砂粒を多く含む。50は胴部が球形に張る二重口縁壺の口縁部破片で51の底部が付くものと考えられる。内面に僅かに粗い

叩き目が残る。胎土は赤褐色を呈し，砂粒を多く含む。

平安時代

54は土師器碗である。やや外開きの付高台を有し，体部下半は手持ちヘラケズリ，他はナデ整形である。胎土はきめ細かく堅緻で明褐色を呈する。底径8.0cmを測る。

55は黒色土器碗である。外開きの付高台を有し内外面共に黒色処理した碗である。底裏はヘラナデ，内面は細かいヘラミガキである。胎土はきめ細かく堅緻である。

中近世

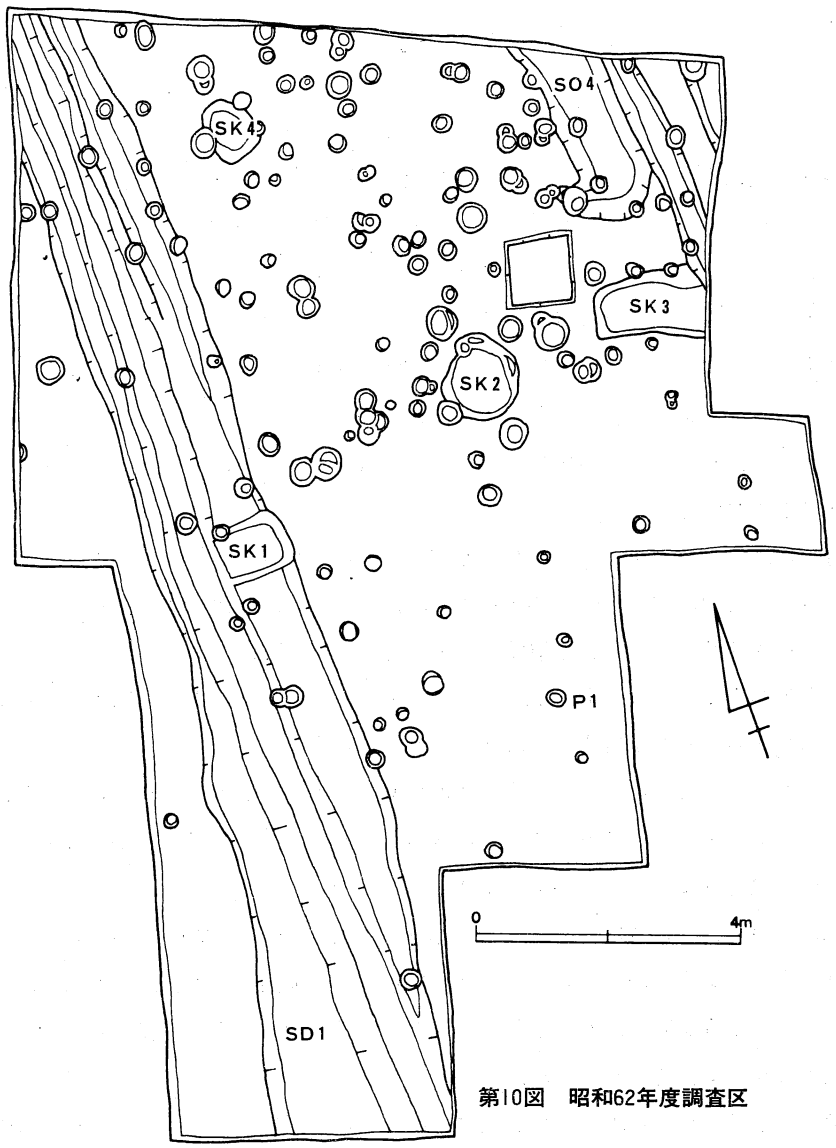
56・57は青磁碗か皿の底部破片である。56は見込み内は内ハゲとなり，底裏は露胎となっている。釉の発色は橙色を呈し僅かに貫入が入り，素地はきめ細かく橙色を呈する。57は底裏のみ露胎で他は淡緑色の厚い釉がかかる。見込み内にはトチンの目跡が認められる。

V　今までの調査成果

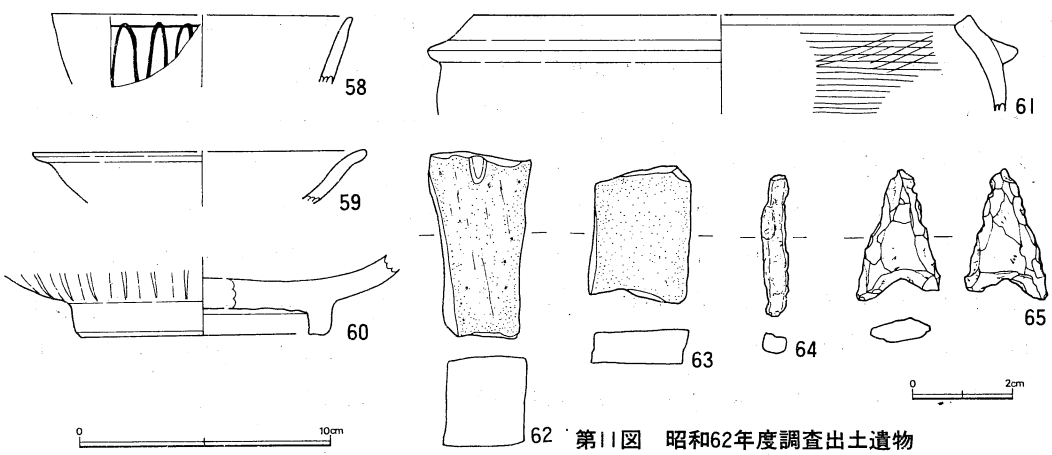
江ノ村遺跡は今回の調査を含め３回の調査が行われている（第２図参照）。昭和63年には今回の調査区部分を含め試掘坑12ケ所の範囲確認調査を行った結果，十字のトレンチ部分で土坑・ピットを20基余り検出しているが，他の西側及び北側の大部分が既に耕作による削平を受けており，江ノ村遺跡の大部分が既に湮滅に近い状況にあったものと考えられる。ここでは昭和62年度調査の成果を参考のために概略をピックアップしておきたい。

検出遺構（第10図）　溝は４条検出しており，ＳＤ１は調査区を南北に縦走し，確認長18ｍ，幅1.7～2.5ｍ，深さ0.25ｍを測る。出土遺物は弥生から古墳時代の土器，中世の土師質土器・青磁，及び近世陶磁器が出土している。他の溝については調査区際にあるため全貌は不明である。土坑は４基確認しており，径１ｍ前後，深さ10cm以下の浅い土坑である。ＳＫ１，３より中世の土師質土器が，ＳＫ２から近世陶磁器が出土している。ピットは141基確認しているが，建物跡の確認までには至っていない。また時期は中世の可能性が強いものの，確実に時期確認できるものは少ないものばかりであった。その中でＰ１からは柱痕（写真８参照）が出土している。

出土遺物（第11図No.58～65）　58は染付筒碗で外面に呉須による絵付を施している。59は白磁皿である。60は青磁皿で見込み内に印花文が観られるものの判然としない。また外面には蓮弁を施し，釉は淡緑色で厚く，底裏は輪ハゲとなっている。61は断面三角形の小鍔の付く鍋である。内面には粗い刷毛目が観られる。外面は鍔から下が煤で黒変し僅かに刷毛目が観察できる。62・63は砥石で62は断面方形で四面共に使用されている。上端には携帯用の孔が付いていたものと考えられる。63は断面が長方形を呈し扁平で四面共に使用されている。２点共に泥岩製で仕上げ砥石であろう。64は鉄製品で錆化が著しいが，断面形は方形を呈する。釘の可能性がある。65は石鏃である。両面とも剝離調整を施し，石質は安山岩製か。



第10図　昭和62年度調査区



第11図　昭和62年度調査出土遺物

Ⅵ まとめ

各時代について概略をまとめると次のようになる。

弥生時代後期前半及び後半から古墳時代初頭にかけての高知県西部に於ける遺跡数は相対的に少なく，中村市に於いては有岡久保ノ畑，上の土居，国見，具同中山，佐岡，安並，入田遺跡等が挙げられよう。しかし，大部分が後期前半の遺跡であり，本遺跡で主体となっている後半から古墳時代初頭にかけての調査は皆無に等しく，高知県中央部との比較検討はほとんどされていない状況であった。しかし今回の本遺跡での弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器群は，高知平野部に於ける弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての「ヒビノキ式」との対比も可能であり，No.1，2，12，48～50の口縁部形態，及び底部形態もNo.51～53，4の平底から丸底へと変移する流れもまた軌を一にしている。

古墳時代に関しては5世紀末から6世紀のNo.9の須恵器坏蓋がＢ７－Ｐ１から出土しており，中筋川流域では有岡，国見，及び具同中山遺跡群の祭祀跡から出土が観られるだけであった。本遺跡のような集落跡と考えられる遺跡からの出土例は，今回が初めてである。Ｂ７－Ｐ１は径1m程の楕円形の小土坑内に土器片220点が集積されており，その中に1点のみ須恵器が埋置されていたものである。また土器片の中には弥生時代から古墳時代のラッパ状に口縁が大きく開く広口壺No.12も混入ではなく出土しており，別の時期のものまでが埋置されている。この時代の遺構としてはピット・土坑が7基検出されているのみであり，Ｂ７－Ｐ１のような土坑は他にないことから性格・機能等については不明のままである。

古代末については円盤状底部を有する土師質土器碗[1]と黒色土器碗が出土している。県下に於いて円盤状底部を有する碗については，高知平野部の土佐国衙，曽我，十万遺跡，中村市ではアゾノ遺跡から出土例が観られる。しかし，まだ高知県下の古代末の研究は緒についたばかりであり[2]，今後の資料の集積を俟たなければならない。

中近世については13～14世紀と15世紀代，近世の18世紀代に大きく分かれそうである。13～14世紀の遺構・遺物は極僅かに散在するのみで，No.28，39，46の東播系鉢，青磁皿，瓦器碗等である。この時期のものについては具同中山遺跡群で比較的纏まって出土している。15世紀代については調査区の北東部Ａ・Ｂ－７グリッドのピット数基が該期に当てはまる。しかし，建物跡の検出までには至らなかった。これらのピット中からはNo.23～25，27の土師質土器碗・小皿類が出土している。18世紀代はＳＢ１，ＳＤ１が該当し染付皿，鉄釉鉢等が出土している。

遺構・遺物に関して各時代に亙り検出しできたものの，耕作による削平を受けているため壊滅に近い状態のため，相対的に遺構・遺物は稀薄であった。しかし，遺存状態さえよければ遺構・遺物とも良好な資料が得られたものと考えられる。また中村市，延ては幡多地域に於ける発掘調査の絶対数が少ないことから，今回の調査で新知見を加え得る成果を上げたといえるであろう。

【注】

1) 円盤状底部の碗については「須恵系土師質土器」，「ロクロ土師器」，または「土師器」との混乱した呼び方をされる一群の土器であり，これは成形技法・焼成方法により須恵器系統のものであるのか，または土師器の系統の範疇内に含まれるかの認識の違いにより，統一した名称とはなっていない。「須恵系土師質土器」に関して福田健司氏は，須恵器と同様に底部切り離しが回転糸切りで，なおかつ野焼きによらないで還元焔焼成であるが，土師器同様酸化焔焼成の状態のもので須恵器でもなく土師器でものないものとしている。つまり製作技法は須恵器の技法を取り入れているもの「須恵系」で，実際のでき上がりは土師器に似たもの「土師質」と解釈できそうである。

また関東の8世紀第1四半期から出土する「平底盤状杯」，所謂〝盤状坏〟についても「須恵系土師質土器」の名称を使っている。ロクロまたは回転台成形で底部切り離しが回転糸切りまたはヘラ切りのもので，還元焔焼成によらず野焼きのものであり，つまり成形技法は須恵器の技法（ロクロまたは回転台成形），また仕上がりからしても土師器であることから「ロクロ土師器」との名称を使う研究者も多い。この〝盤状坏〟ついては「土師質」という概念規定に当てはまらず，〝土師器〟そのものであることからして，もし福田健司氏の言うように「須恵系」という言葉を冠するならば〝須恵系土師器〟という名称にならざるをえない。

本遺跡で出土した土器の様な須恵器の成形技法で焼成も還元焔焼成ででき上がりも須恵器に近いものは，〝須恵系須恵質土器〟または〝須恵系須恵器〟の名称を使わざるをえない状況に焔ってしまう。実際，そのまま「須恵器」と呼ぶ研究者も観られ，これらは共に須恵器概念の拡大解釈が行われており，所謂「東播系須恵器」・「東播系中世須恵器」の「中世的土器様式」までにも拡大解釈が行われているのが現状である。これらは基本的には「律令的土器様式」と把えるのか「中世的土器様式」と把えるかの時代的認識の相違に惹起しているものと考えられる。

古代末に関しては，律令的生産体制から中世的商品経済体制への端境期に当たり，「律令的土器様式」から「中世的土器様式」への脱却期であり，これを「模倣」との概念で把える研究者も多い。しかし，技法的には〝踏襲〟が観られるものの須恵器生産体制の崩壊過程から既に「中世的土器様式」を〝意図・志向〟したものであり，「模倣系土器」の概念規定で把えきれないものと考えられる。したがって，本報告書では〝土師質土器〟として報告してある。

2) 松田直則 「土佐における古代末から中世の土器様相－模倣系土器の展開を中心にして－」（『中近世時の研究Ⅴ』日本本中世土器研究会 1989 所収）に於いて編年が試みられている。

【参考文献】

橋田庫欣 1969 「考古編」『中村市史』高知県中村市

岡本健児 1973～1974 「入門講座 弥生土器 —四国—」（『考古学ジャーナル』88～93 ニュー・サイエンス社 所収）

岡内三眞 1983 「高知出土の輸入陶磁器」（『高知の研究1 地質・考古篇』清文堂 所収）

福田健司ほか 1986 「シンポジウム古代末期～中世における在地系土器の諸問題」（『神奈川考古 第21号』神奈川考古同人会 所収）

森田 稔 1987 「東播系中世須恵器の生産と流通」（『中近世土器の基礎研究Ⅲ』日本中世土器研究会 所収）

松田直則 1987 「高知県における中世土器の様相—15・16世紀を中心として—」（『中近世土器の基礎研究Ⅲ』日本中世土器研究会 所収）

橋本久和・福田健司ほか 1988 「中世土器研究会討論記録 古代末から中世の土器・陶磁器」（『中近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会 所収）

中野良一 1988 「愛媛県における古代末から中世の土器様相」（『中近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会 所収）

鋤柄俊夫 1988 「畿内における古代末から中世の土器—模倣系土器生産の展開—」（『中近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会 所収）

前川 要 1988 「中世土器・陶器の研究史と問題点—古代末・中世初頭の時期区分を中心として—」（『中近世土器の基礎

研究Ⅳ』日本中世土器研究会　所収）

松田直則　1989　「土佐における古代末から中世の土器様相―模倣系土器の展開を中心にして―」（『中近世土器の基礎研究Ⅴ』日本中世土器研究会　所収）

松田直則　1990　「高知県」（『第27回埋蔵文化財研究集会　中世末から近世のまち・むらと都市　第５分冊』埋蔵文化財研究会・（財）大阪市文化財協会　所収）

岡本健児・廣田典夫　『ヒビノキ遺跡』高知県土佐山田町教育委員会

森田尚宏ほか　1985　『林田遺跡』高知県土佐山田町教育委員会

松田直則ほか　1985　『中村城跡』高知県中村市教育委員会

木村剛朗　1985　『栗本城跡』高知県中村市教育委員会

岡本健児ほか　1986　『田村遺跡群』高知県教育委員会

山本哲也　1987　『塩塚城跡』高知県中村市教育委員会

出原恵三・松田直則・廣田佳久　1988　『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　古津賀遺跡・具同中山遺跡群』高知県教育委員会

高橋啓明・出原恵三・吉原達生　1988　『十万遺跡』高知県香美郡香我美町教育委員会

森田尚宏・松田直則　1988　『岡豊城跡発掘調査概報　第１～３次調査』高知県教育委員会

出原恵三・松田直則・廣田佳久　1989　『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　風指遺跡・アゾノ遺跡』高知県教育委員会

高橋啓明・吉原達生　1989　『曽我遺跡』高知県香美郡野市町教育委員会

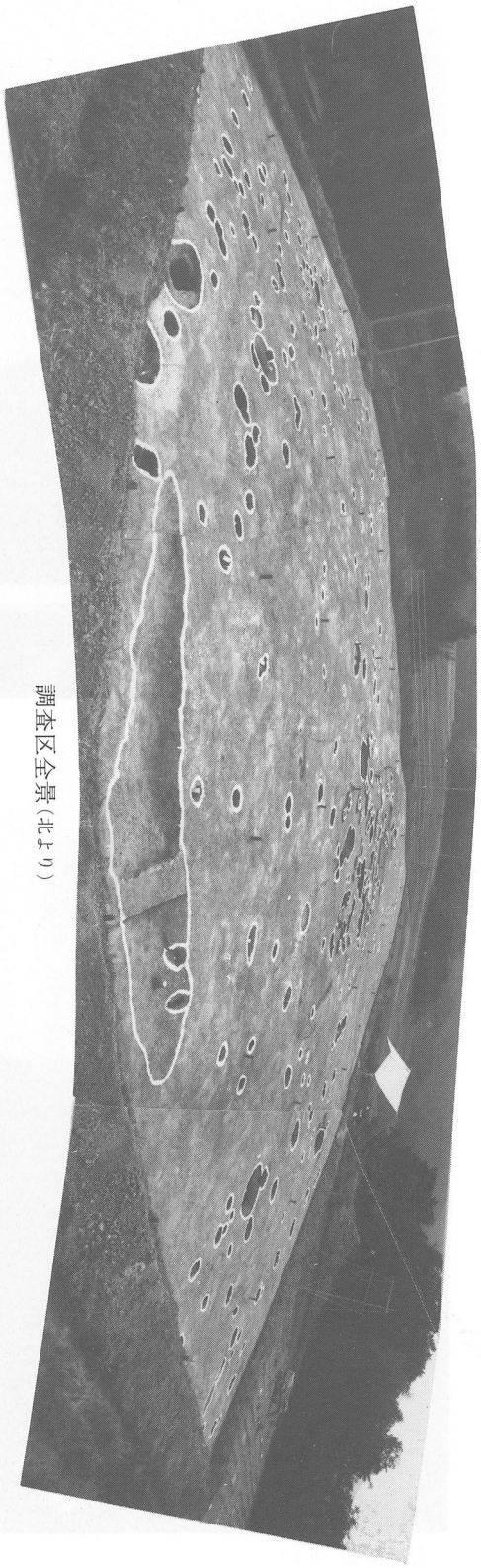
廣田佳久　1989　『土佐国衙跡　第９集』高知県教育委員会

写真1

遺跡遠景（北より）

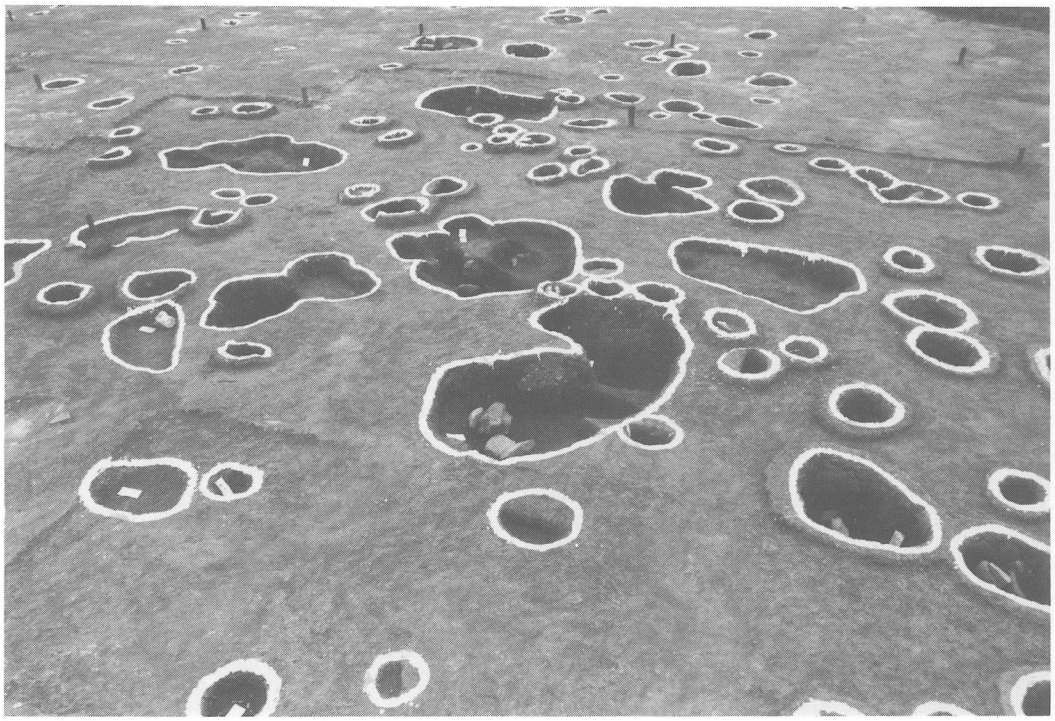
遺跡遠景（東より）

写真2

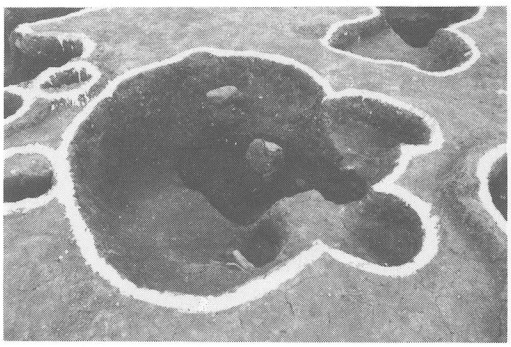


調査区全景（北より）

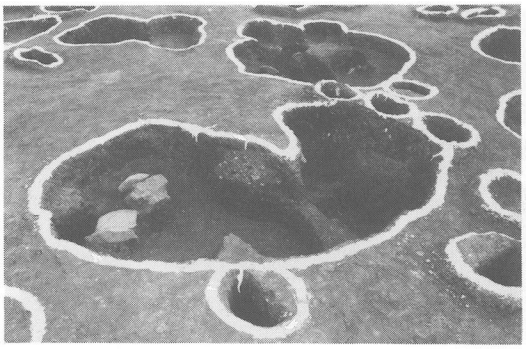
調査区全景（西より）



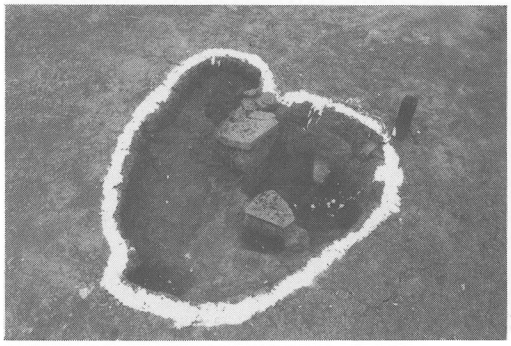
中央部土坑・ピット群



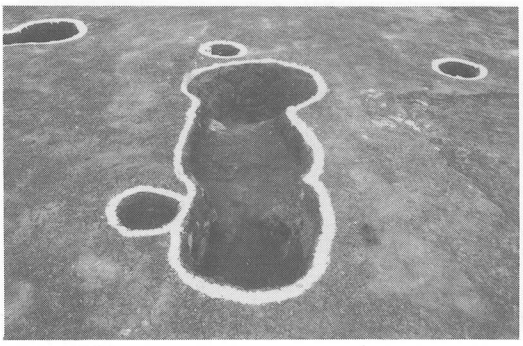
D4－SK2



D3－SK1

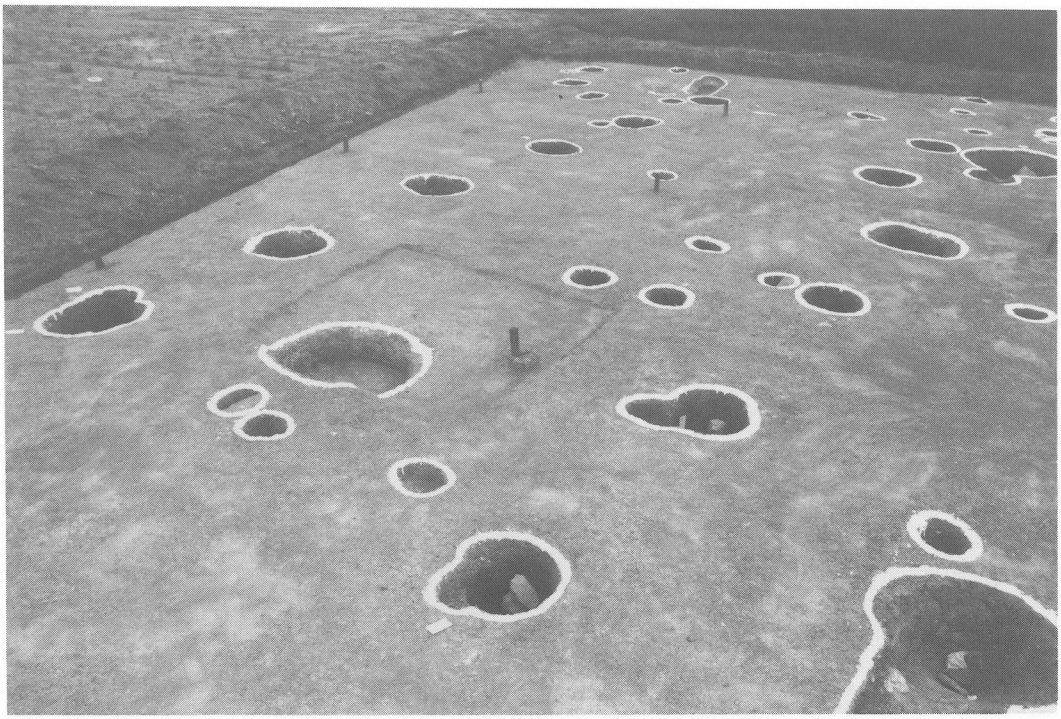


D5－SK1



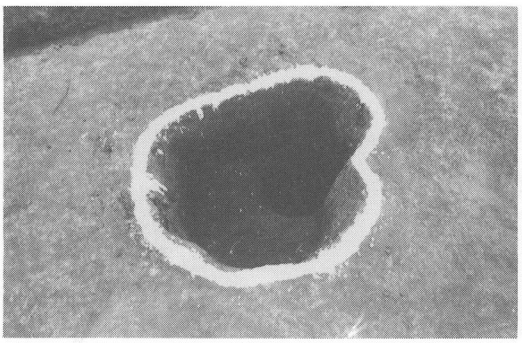
D2－SK1

写真４

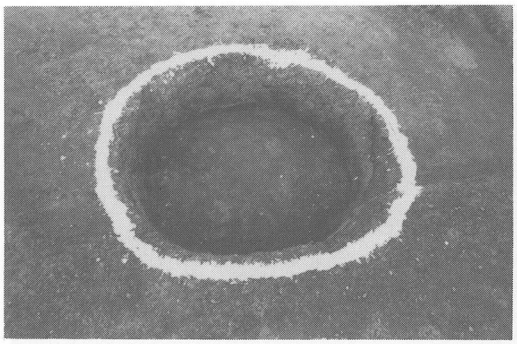


SB1

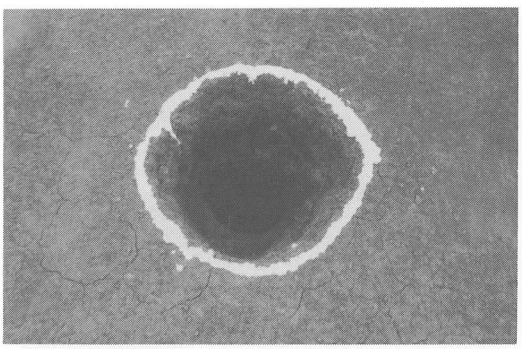
SB1－P4･5･11･12



SB1－P10



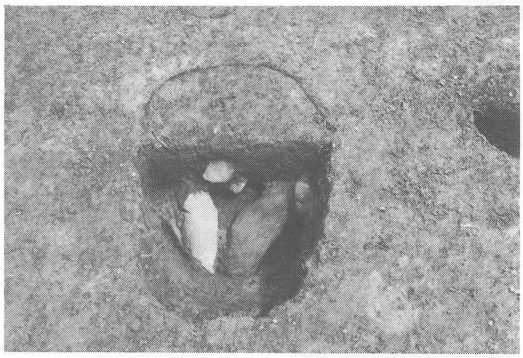
SB1－P18



SB1－P7

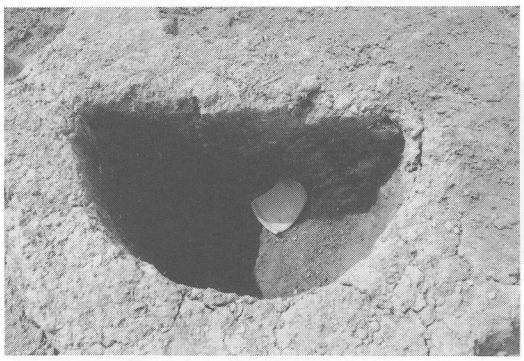
SD1

B7－P1　土器出土状況



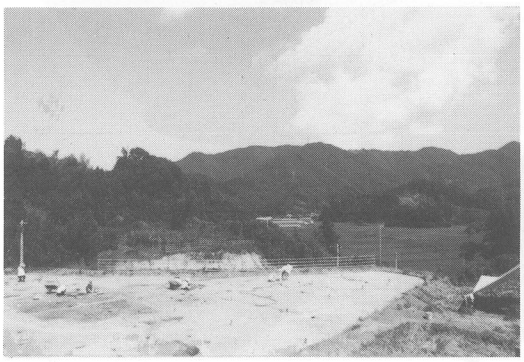
E3－P4　レキ出土状況

C6－P3　土師質土器碗出土状況



D4－P11　天目茶碗出土状況

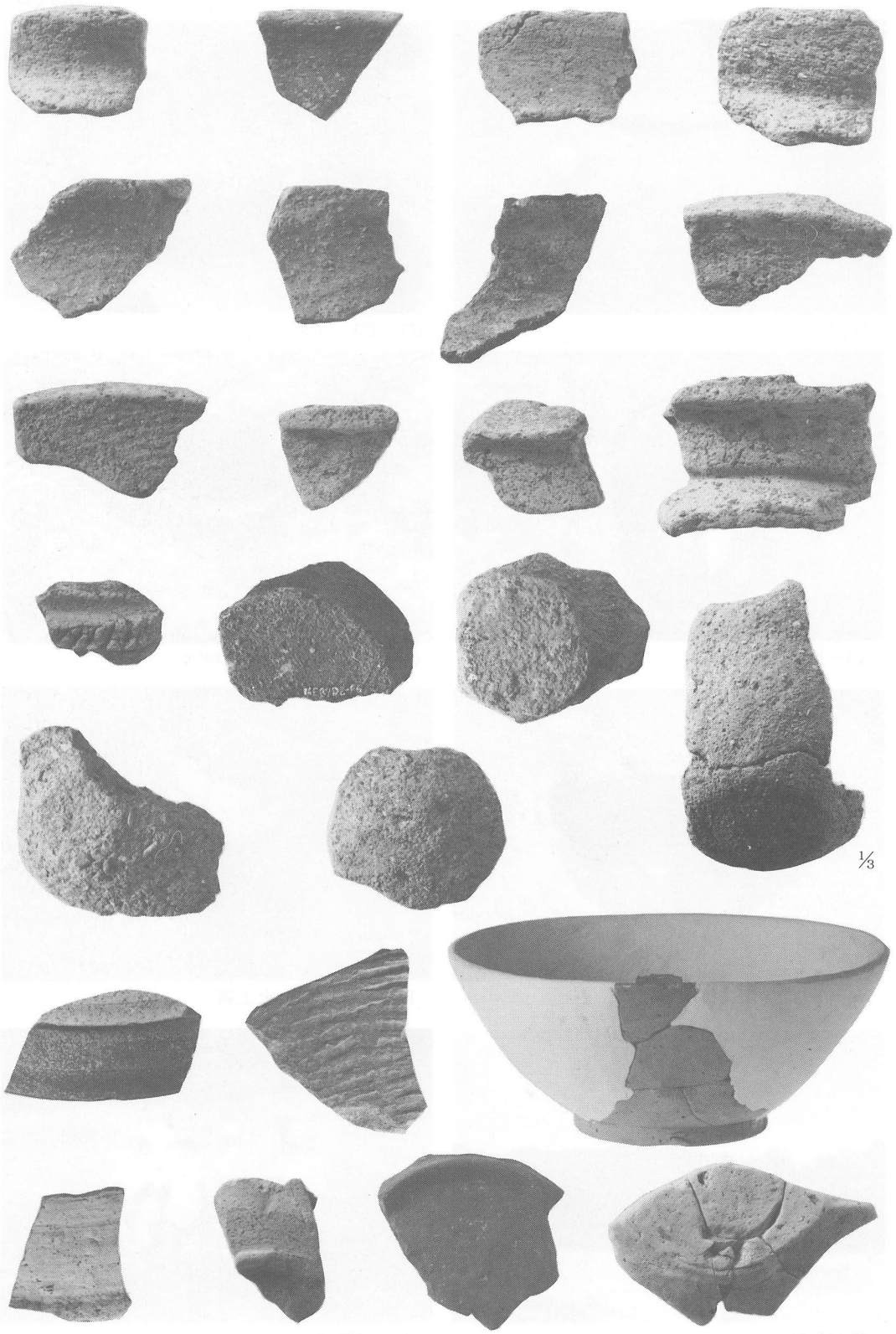
F4 グリッド出土土器



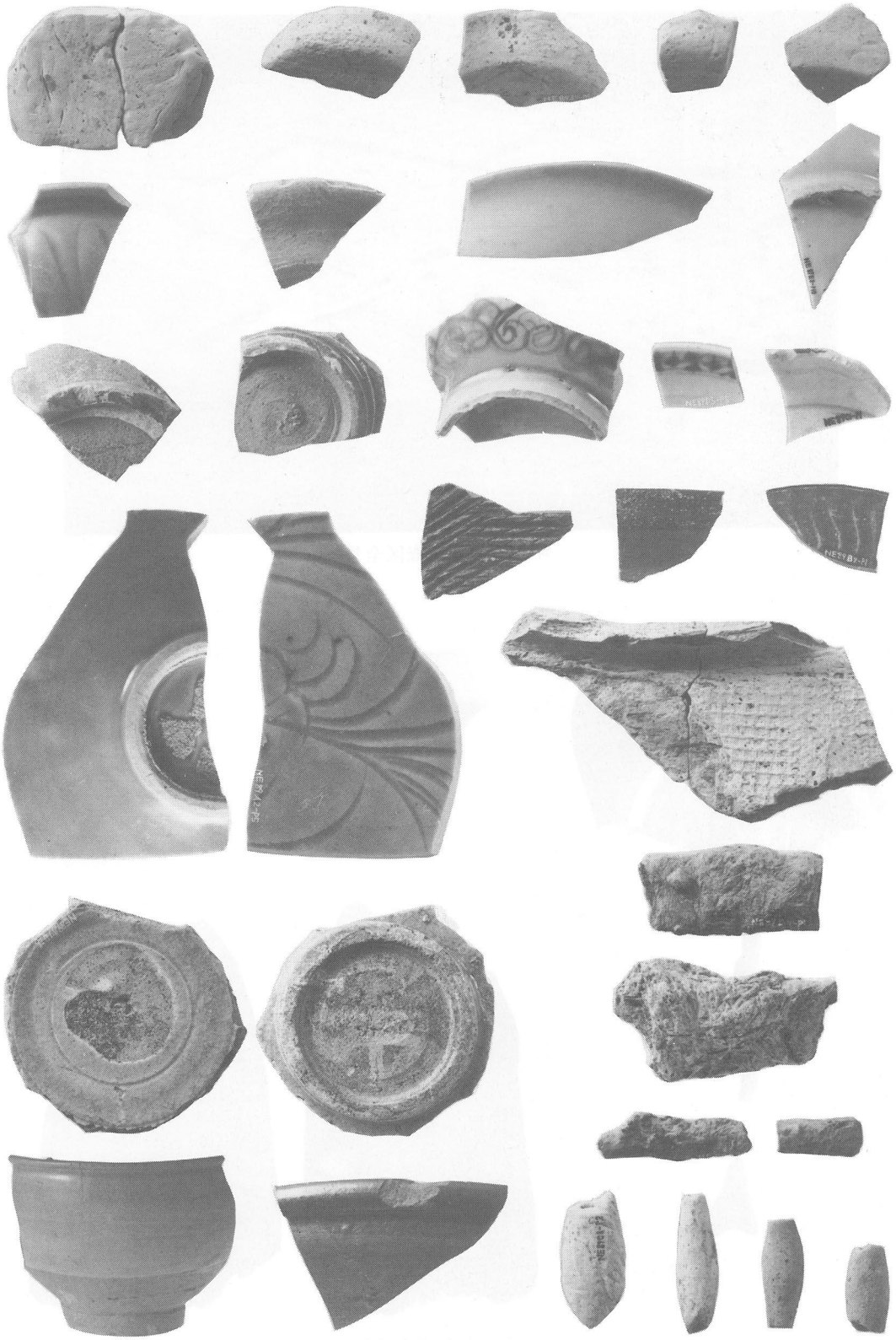
調査風景

発掘参加者

写真6



遺　物（1）　※スケールは特に表記のない限り½である。



遺　物 (2)

写真8

昭和62年度調査区全景

1/4

昭和62年度調査遺物

江ノ村（えのむら）遺跡

〈所 在 地〉 高知県中村市江ノ村イゲの上
〈遺跡内容〉 弥生時代後期，古墳時代初頭，平安時代，中近世の集落跡
〈立　　地〉 低位丘陵舌状部，海抜20m
〈調査主体〉 高知県中村市教育委員会
〈調査原因〉 農地改良
〈調査期間〉 平成元年７月３日～同年８月15日
〈遺跡面積〉 推定7,000m²
〈調査面積〉 約400m²
〈検出遺構〉 弥生・古墳時代―土坑約10基，ピット約40基
平安時代―ピット・土坑約10基
中近世―掘立柱建物跡１棟，溝跡１条，ピット・土坑約30基
時期不明―ピット約200基
〈出土遺物〉 弥生・古墳時代―土器片約3,400点，須恵器杯蓋，須恵器甕片，石鏃等
平安時代―土師質土器碗，黒色土器碗等
中近世―青磁，白磁，天目茶碗，染付，土師質土器碗・皿，瓦器碗，土錘等
〈執 筆 者〉 中村市教育委員会，前田光雄（高知県教育委員会）

〈要　　約〉 本遺跡は弥生時代から近世まで断続的に営まれた集落跡である。遺跡は耕作により削平され，遺跡の全貌は不明だが今までの調査及び今回の調査により，弥生時代後半から古墳時代初頭にかけての集落跡がメインであることが判明している。高知平野部に於ける該期と同様の様相を呈するものと考えられる。

他の時代については遺構・遺物共に稀薄であるものの，中筋川の氾濫を避け低位丘陵部の突端に展開した集落形態であり，古代末・中世の高知県西部に於ける集落景観の在り方の一様相と把えることができよう。

高知県中村市埋蔵文化財調査報告書第７集

江　ノ　村　遺　跡

平成２年２月２２日　印　刷
平成２年３月３１日　発　行
編集・発行　高知県中村市教育委員会
印　　刷　北岡印刷所